

# 「異文化体験を準備する」

国際教養学部 英語コミュニケーション学科 中村 啓佑

## はじめに — 昨年度との相違点

昨年度に引き続いて「特色ある教育」に挑戦した。ただ、挑戦である以上、二つの点で新しいことを試みた。

まずテーマを新しくした。ここ数年来私の講義の中で大きな位置を占めていたが、少し停滞気味であった「異文化」関係の講義に新たな息吹を吹き込みたかったからである。

「異文化」の「体験学習」ということなら海外に行ってみるのがいちばんいいのだが、限られた予算では難しい。そこで、①「内なる異文化」に触れて文化の多様性を実感する、②異文化体験者の話を聞くことで異文化を考える、この二つを主たる目的とした。今すぐに異文化の中で生活するわけではないが、その日のために早くから考えを巡らせておくことが必要だと考えたからである。テーマを「異文化体験を準備する」としたのはそのためである。

次に、昨年度は対象クラスが一つであったのに対し、今年度は、共通科目「異文化交流とコミュニケーション」および、専門科目「異文化間コミュニケーション論」の2クラスを対象にした。両講義の目的と内容は『特色ある教育報告 別冊—異文化体験を準備する—』に回し、ここでは、本プロジェクトの眼目に絞って、1. 計画と実際、2. 二つの学外研修活動、3. 異文化体験者の話を聞く、4. 異文化体験者へのインタビュー、の四つの側面から報告したい。

本報告書に掲載できなかった学生のレポートをはじめとして、詳しくは『報告 別冊』をご覧ください。

## 1. 目的と実際 — できたこと、できなかったこと

以下は応募書類に書いた計画である。すべてを実現することはできなかったもので、実現できたこととできなかったことを明確にしておく。

### 《「特色ある教育」申請企画内容の一部》

今回の企画の教育目標と予想される効果は、異文化体験者、あるいは、異文化具現者と交流し、実践的コミュニケーションを通して将来の異文化体験に備えることである。

具体的活動としては、以下の4点を予定している。

### 1. 内なる異文化を経験する（現場調査）

1) 神戸中華街と神戸華僑歴史博物館

2) 大阪市生野区の 코리아・トライアングル（桃谷→ 코리아タウン→鶴橋）

などを探訪し、それぞれの地域形成の歴史的経緯を聞き、住民と交流する。

### 2. 異文化体験者の話を聞き、レポートを作成する（経験談の聴取とその要約）

卒業生を中心として、長期の異文化体験者にお話をいただき、その後、交流の場を設ける。

### 3. 異文化体験者にインタビューする（調査対象者との交流）

学・内外の長期異文化体験者、ならびに、各国領事館、文化センターなどを訪問してインタビューし、レポートを作成する。少なくとも、誠実で、意識的受講者（出席してまじめに聞こうとする学生）全員が参加できるよう、対象を個人、団体を併せて 20～30 用意し、2、3 名のグループでインタビューを実施する。

### 4. 報告書を学生の手で制作する（試行錯誤を重ねて作品を作り上げる）

1～3の活動を総合し、希望者を中心として報告書を作成したい。

「1. 内なる異文化を経験する（現場調査）」「2. 異文化体験者の話を聞き、レポートを作成する（経験談の聴取とその要約）」の2項目は、完全に実現することができた。「3. 異文化体験者にインタビューする（調査対象者との交流）」については、予定の半分を実現するにとどまった。年来の知己、友人は数に入っていたし、2008年3月20日に開催された「関西フランコフォニー祭 2008（フランス語圏の組織と個人の集い）」の会場でも、各国領事館、文化センター関係者と交流をもち、インタビューの許可をとっていた。が、連絡が煩瑣であること、また、通訳が必要なことなどから、そうした外部の人たちを対象にすることは諦めざるをえなかった。結果として、比較的コンタクトがとりやすく、学生にとってもインタビューしやすい、学内の異文化経験者を対象とすることになった。

「4. 報告書を学生の手で制作する」については、一部学生の意見を聞いたにとどまって、最終的には筆者一人で作成する結果となってしまった。これは、この「報告集」にしる、「報告集別冊」にしる、着手が予想よりもはるかに遅れてしまい、年度末のレポート提出期間、試験期間と重なって、学生に作業の依頼ができなかったからである。肝心の「学生の手で」が抜けてしまって「報告書を制作する」とどまったのは残念であった。

以上の事柄を総合すると、異文化体験者にインタビューするという目的は果たせているので、7割がた実現できたと言ってもいいだろう。

## 2. 二つの学外研修活動 - 内なる異文化を探訪する

この現地体験学習活動は、今回の特色ある研究の中の目玉である。というのは、「異文化交流とコミュニケーション」においては、従来から「日本は一部で言われているように単一民族国家ではないし、日本列島という地域が一色の文化に彩られているわけではない」ということを力説しているからである。また、今年度からはじまった「異文化間コミュニケーション論」では、なぜ「異文化教育」が必要なのかという説明に、国際的な理由はもちろん、国内的理由の説明に時間をあて、なぜ日本に韓国・朝鮮人、中国人が数多く住んでいるのかを説明しているからである。

第1回は、6月7日大阪市生野区の 코리아タウン探訪であった。環状線桃谷駅で下車し、桃谷商店街→ 코리아タウン→鶴橋国際マーケットという、いわゆる 코리아・トライアングルを探訪した。 코리아タウンの「異文化交流の家」では、 코리아 NGO センター代表理事の宋 悟氏から、なぜ大阪に在日韓国・朝鮮人が多いのか、なぜこの地域が 코리아タウンとして形成されたのかを伺った。「街の存在は聞いてはいたが、訪れるのは初めて」という学生が多く、単なる知識としてではなく、今や観光地として賑わっている 코리아タウン、鶴橋駅界隈の入り組んだ街の活気に、住民のたくましさを実感できたようだ。

第2回は6月14日、神戸中華街と華僑歴史博物館の探訪であった。

同日14時に大阪駅に集合、15時半から同博物館で館長の藍璞氏のお話を伺ったあと、藍氏のご案内で展示を見学した。藍氏は、後で知ったのだが、神戸同文学院で長年にわたって教鞭をとっておられたとか。若い人たちに対する愛情がことばの端々に感じられる、「老先生」と呼ばれるにふさわしい方であった。お手製の詳しい年表を使って、神戸における華僑の歴史と神戸中華街の成り立ちを非常にわかりやすく説明して下さった。探訪後の学生のレポートを読んでみて、「中華街」の存在も、「華僑」の存在も知らない学生が少なくなかったので、行ってよかったと実感した。紙面の都合上、1名分だけを掲載する。

## 《南京町を訪れて》

08pp178 平中丹穂

私が南京町を訪れたのは今回で2回目だった。1回目は単なる気軽な観光で訪れたので、そのときに抱いた印象は、お手軽でにぎやかな中華街というものとどまっていた。だが、今回その背景にある歴史を学んで改めて南京町を訪れてみると、一回目のように単なる中華街としてみることはできなくなった。なぜならそこに歴史の息づかいを感じたからだ。

今回私は南京町が旧外国人居留地横の食品市場であったことを初めて知った。そして、その食品市場が現在の南京町とは違い、生活に密接したものを売っていたことも初めて知った。今ではいかにも中華の街という感じだが、これが日本の商店街のようであったと言うのだから本当に驚いた。そして未だ残っている店があるという、神戸華僑歴史博物館の館長さんの言葉にはさらに驚いた。一回目に来たときにはそんな店があったような覚えがなかったのだ。だがそれは私の間違いだった。ひとつひとつの店を注意深く見てみると、確かに日本の食品売りの店が数軒残っていた。そのうちの一件は八百屋で、生のフルーツを串刺しにした商品を店先で売っていた。昔はフルーツの串刺しは売っていなかったと思うが、「昔の人たちもこの店で買い物をしていたのだろうか」と思うと感慨深かった。

だが、今回の神戸研修で私にとって一番価値があったのは、華僑4世である神戸華僑博物館館長に出会えたことといえるだろう。展示物でも町並みでも表しきれない、確かにそのときその場で生きてきた人々の確かな証、「生」を感じた。これは、今までこういった歴史をどうしても客観的に、静止したものとして捉えてきた私にとって目から鱗の体験だった。確かにここで暮らし、結婚して、家庭を作り、営んでいたのだと、頭では分かっていたはずなのにその事実を初めて真に理解した気がしたのだ。

これらの体験はこれからの私に大きな影響を与えるだろう。今まで私はあまりこういった場所に関心がなかった。訪れはしてもただの観光地としてで、目の前に日本の異文化交流の軌跡があったことにさえ気づきもせず、また知ろうともしていなかった。そして知ったとしても、それは静止した大昔のことで、「生きて」私の中に残ることはなかったのだと実感した。だが、ではこれからまたこういった歴史について学んだとき、同じように感じられるかという分からない。やはり静止したものとして捉えるかもしれないし、今回の体験を重ね合わせて「生きて」残せるかもしれない。それはその場にならなければ分からないが、確かなことは異文化の壁を越える、理解するには多少なりともやはり人との交流がとても大切だということだと思った。

### 3. 異文化体験者の話を聞く

6月24日(火)5限目に、お二人の異文化体験者の話を聞いた。お一人は、本学の留学生で4回生婁麗雅氏。もうお一人は在日韓国人の池清琴氏である。婁麗雅氏は、中国の教育と比較して日本の教育に関する印象と見解を述べられ、池清琴氏は、日本、韓国、英国の三つの文化の相違を話された。婁麗雅氏は学生たちと年齢が近いこともあったし、また池清琴氏は非常に気さくな方であるので、学生たちは親近感をもって熱心に話を聞き、質問も多かった。直後の印象記では、両氏の話に強い興味を抱いたことが一様に述べられていた。両氏の話の内容は『報告 別冊』に譲る。

### 4. 異文化体験者へのインタビュー

異文化体験者に対するインタビューを行い、これをもとに期末レポートを書いた者は、両クラスの実質受講者約120名の内、約四分の一の30名である。インタビューの相手をしてくださったのは、異文化体験者である本学教員4名と本学留学生6名、あわせて10名であった。紙面の都合上、1篇のみを掲載する。インタビューの詳しいいきさつと、レポートは『報告 別冊』をご覧ください。

#### 《インタビューの結果報告》

国際教養学部 英語コミュニケーション学科  
07CE065 佐々木 愛

#### 【目次】

1. クインさんに出会うまで
2. インタビュー当日
3. 日本人の礼儀について
4. 日本とベトナムの学校の違い
5. まとめ

#### 1. クインさんに出会うまで

わたしは、ター・ダック・クインさんにインタビューをした。今からインタビューの内容や、インタビューを聞いて自分が感じたことについて、書いていこうと思う。

クインさんは、24歳のベトナム出身の方である。日本に来たのは、約3年前と言っていた。日

本に来て最初の1年半は、日本語学校に通い日本語を習得した。その後、大学に入学し、現在私と同じ2回生である。クインさんに初めてメールを送った時は、まだ日本に来てどれくらい経ったか分からなかったで、なるべく簡単な日本語で送った。しかしクインさんの返信は、日本人とあまり変わらなかった。その時わたしは、日本語の上手さに、とても驚いた。そしてクインさんが、すぐに返事を送ってくれた事によって、インタビューの日程も早く決まり、準備をスムーズにすることが出来た。

## 2. インタビュー当日

6月30日に私たちは、インタビューをした。最初は、お互い初対面だったこともあり、沈黙が多かった。しかしインタビューを通して、だんだんと会話が弾んでいった。

クインさんは、日本に来てわずか3年しか経っていないのに、日本語がとても上手だった。それは、クインさんが日本語を習得しようと、必死で勉強したからだと思う。その姿勢は、尊敬すべき点だと思った。

## 3. 日本人の礼儀について

まず始めにわたしたちは、日本の印象を聞いた。クインさんは「礼儀正しい人達が多い国だと思った」と答えていた。具体的に聞くと、挨拶をきちんとする所を挙げている。ベトナムでは、店に入っても店員さんは「いらっしゃいませ」など何も言わないのが当たり前である。また食事の時に「いただきます」や「ごちそうさま」と言う、日本独特の文化にも、最初は驚いたようだ。

しかし「礼儀の正しさ」が、クインさんを悩ませる事もある。それは、日本人の遠慮をする所だ。日本人はご飯を食べる時に、まず相手の顔を窺ってから食べる人が多い。そのような文化がベトナムには無いため、今でも「どこで遠慮をしているのか、判断しがたい」と話している。確かに、「遠慮する所はどこか？」と聞かれても口では説明しづらい。やはりそのような所は、ずっと日本に住んでいるからこそ区別できるのだと思った。

## 4. 日本とベトナムの学校の違い

次にわたしたちは、ベトナムの学校について聞いた。日本とベトナムでは、小学校と中学校の学年制度が違っていた。ベトナムの小学校は、1~5年生までしかない。その代わりに中学校は、1~4年生となっている。

そしてもう一つ違うのは、ベトナムの学校はお昼までという所である。では、お昼から学生たちは、何をして過ごしているのだろうか？その質問には、「大体の子供は、そのまま家に帰るか、親の仕事の手伝いをする」と答えていた。この答えからベトナムの子供たちは、放課後に友達と遊ぶという習慣があまりないことがわかった。

## 5. まとめ

インタビューを通じて、感じたことがいくつかある。一つは、自分で気付かなかった「日本の良い所」が見えた気がする。それは、「礼儀の正しさ」である。授業で池さんの話を聞いた時も、同じことを話していた。礼儀に関しては、日本人がもっと誇りに思っている部分だと思う。

もう一つは、ベトナムの学校が昼までと聞いて、もし日本の学校が昼までの制度に変わったら、どうなるかと考えてみた。その結果は「日本の子供たちはベトナムの子供と違い、親の手伝いなどしないだろう」という考えだった。その理由として、日本の大半の親はサラリーマンが多い事が、挙げられる。それはベトナムと日本の親の、職種の違いだと思う。

わたしはこのインタビューで、異文化の面白さを感じ、外から見える日本は、どのように映っているのか、もっと知りたいと思った。これを機会に、たくさんの異文化に触れていきたいと思う。

## まとめ

今回の「特色ある教育」では、①「内なる異文化」に触れて文化の多様性を実感する、②異文化体験者の話を聞くことで異文化を考える、の二つが主たる目的であった。果たして、その目的は達成できたと言えるであろうか。

もちろん数値に還元できるような答は求めるべくもないが、授業中レポートや期末レポートを見る限りにおいて、少なくとも次のようには言えるであろう。すなわち、企画者の意図を最初から受け止めて意欲的に行動し、意識的に考え、その結果を表現しようとした者にとっては、二つの目的は十分果たせていると。

学外探訪やインタビューに参加した者の内にも、単なる好奇心から参加して、好奇心を満足させることができればそれでよしとする者もあるだろう。一方、参加できなかったけれども、授業中の話や講演者の話に触発されて、異文化の問題をこれまで以上に考えようとした者もあるに違いない。

こんなふうで大雑把な分け方をするならば、どんな授業でもことは同じであり、知的意欲をかきたてられる者とそうでない者がいるということになってしまう。しかしながら、授業の中で教師の口から語られる街についての知識と、色彩や臭いや人々の声を五感で受け止めつつ街の中の時間を生きることとは同じではない。教師の口から語られる知識としての歴史と、証人たちが体で語る歴史とは決して同じではない。体験と交流の中で生み出されるものは、学生のレポートにもあったように、「静止した大昔のこと」ではなく、「『生きて』私の中に残ること」なのだ。そして、それがあからこそ、私たちは面倒な準備や仕掛けを厭わずに「特色ある教育」を実践しようとするのである。